

### 第3章 着地型観光の課題と意義

#### 第1節 着地型観光の課題

##### <経済効果>

着地型観光によって、地域の経済的効果が見込めるかといえば、たちまち大きな効果が見込める可能性は低いと言わざるを得ない。この点、金井萬造によると、「着地型観光はなかなか儲からないものです。なぜかと言うと、再々申し上げているように、利益ではなく、理想を追求していくスタイルだからです。(中略)自然の素晴らしさをただ楽しむのではなく、自然環境を守ったり、改善するために行動する、あるいは地域のまちづくりのために貢献する、そういったことも観光だと言われだしました。着地型観光もそれに対応した内容になっています<sup>50)</sup>」という。従来の観光スタイルは、旅行エージェントにより、大量の団体客を相手に、お金を消費してもらえそうな観光スポットに引率して、その対価が旅行会社に流れ、また同時に地域へもお金が落ちることで、旅行ビジネスとして成立していた。これに対し、着地型観光は、地域ならではの固有の価値を来訪者に味わってもらいたいという住民側の願いでもって成り立っている。

自然を愛し、守り、改善することを楽しみを感じる、そのまちの伝統文化に触れる、地域のまちづくりに貢献することに満足感を得る、といった新しい観光に対応していく以上、効率良く儲けるといふ点からはやや離れるかもしれない。しかし、着地型観光で経済効果を望むのであれば、旅行会社や知識・ノウハウを持った専門家と連携し、着地型商品のメニューリストの作成や観光客向けのサービス内容を検討して付加価値を増大させ、そこに利益を生み出すなど、さらなる模索が必要となる。

##### <担い手>

次に、着地型観光の担い手について考えると、地域住民が活動の主体となっていくことが期待される。ただし、はじめから着地型観光の実施全てを住民に求めることはできず、当然、旅行会社、専門家、行政などによる支援が必要であり、この支援のあり方は十分検討される必要がある。

また、地域住民が観光まちづくりの主体となっていくためには、地域住民が行動をはじめめるための動機づけも必要となる。そのため、地域住民が、身近にある地域課題への当事者意識を持ち、自分たちの将来のために行動を起こすことの意義が了解され、またそれが住民間で共有されたのちに、そうした想いが、住民活動へとつながり定着することが望ましい。そのとき、地域住民の役割が、着地型観光を主導する担い手として位置付けることができるのであろう。

忘れてはならないことだが、そもそも地域住民は、着地型観光を実施するために地域活動を行うものではない。よって、地域住民に対し、担い手となっていくべきだという

<sup>50)</sup> 2008年度 都市環境デザインセミナーにおいて。

“べき論”ではなく、担い手となっていった欲しいという捉え方でもって、“我々が住む地域のために一緒に考えませんか”、“一緒に行動をはじめてみませんか”という姿勢こそ大切であるということをお付言しておく。

### ＜他の地域諸活動との関わりと事業主体＞

さらに、着地型観光の実践を通して生じる点を、さらなる複数の点でつなぎ合わせて、面的な拡がりをもたせていかなければ、一過性の取り組みに終始してしまう。すなわち、草の根の活動による着地型観光が、はじめのうちは小さな芽に過ぎないとしても、それが他の歴史伝統文化や商工産業などといった、地域社会を取り巻く多様なモノ・コト・ヒトと連動し合っこそ、地域を巻き込む観光まちづくり活動となっていくのであろう。

この“連動”を可能にするような仕組みをつくり、上手く機能させていくのは、「観光まちづくりプラットフォーム<sup>51</sup>」のような新しい事業主体だと考えられる。この新しいプラットフォームが着地型観光の推進母体となり、住民による観光まちづくり活動と他の地域諸活動とを繋ぎ合わせる役割を果たす可能性もある。

こうした住民による観光まちづくり活動と既存の地域諸活動がどのような関係にあれば望ましいか、あるいはいかに繋ぎ合せていくのかという点、また、観光まちづくり活動を推進していく事業主体のあり方についても今後さらに検討すべきポイントといえる。

以上の点が着地型観光の抱えるこれからの重要な課題となつてこよう。

## 第2節 着地型観光を行う意義

金井の指摘から、現時点で着地型観光に大きな経済効果は望みにくく、また、戸所の指摘から、本市において着地型観光単独で大きな交流人口の拡大をはかることは難しいと考えられる。しかし、着地型観光には次に示す重要な意義がある。

今はまだ大きな経済効果は見込めないとしても、着地型観光の手法は、地域住民によるまちづくりの手法そのものだといえよう。つまり、着地型観光とは、その土地の歴史、匂い、食、生活文化やそこに住む住民自身に対して強い関心を持った観光客の要望に応えるため、地域の固有性・独自性を引き出すことに注力するが、この手法こそが地域のまちづくり・町おこしにとって重要なことだからである。この点、尾家・金井も「地域資源の検討にあたって、着地の観光まちづくり、地域産業づくりと一体のものとして展開することにより、地域資源の発掘と着地型観光の展開が可能となる<sup>52</sup>。」と述べてい

<sup>51</sup> 観光まちづくりプラットフォームの説明については、I部第4章第2節4③を参照されたい。

<sup>52</sup> 尾家・金井『これでわかる！着地型観光 地域が主役のツーリズム』PP18-19より。

る。

したがって、地域住民が自地域の抱える問題に気付き、自分たちのまちをより良くしたいという想いに依った地域づくりに取り組むことができれば、それはまさに住民主体のまちづくり活動といえる。

また、このことは同時に、地域住民が観光まちづくりに参加することへの大きな動機づけとなりうる。なぜなら、地域住民が自らの手によって埋もれていたまちの魅力を蘇らせ、まちの良さや特徴を発見したり再確認したりすることは、大きな感動につながり、地域への愛着や誇りを高めることになるからである。さらに、そうした着地側の住民が観光まちづくりを通じて味わう感動と、観光客がそのまちの生活や伝統や産業に触れたときに受ける感動という、その両者には近いものがある。

そして、この地域の固有性・独自性を開拓し魅力ある地域に育て上げていく実践活動こそ、地域ブランドの醸成へ向けた一つの道筋である旨も繰り返し述べておく。大きな交流人口の拡大をはかるためには、このブランド力の向上が重要なファクターとなるからである。

すなわち、着地型観光がもつ重要な意義とは、①住民自身の手によって自らが住む地域の再生や改善、②着地型観光手法を通じて、新たな地域の魅力を創造し、地域のブランド力の向上を果たすためのツールとなりうること、だといえる。